

泉鏡花の作品における女性像― 「義血侠血」「外科室」「照葉狂言」 「高野聖」を中心として

林 雪 星

鏡花は明治六年（1873）に独特な文化伝統をはぐくんできた金沢に生まれた。父の清次は、名工として知られた彫金師であり、母すずは加賀藩お抱えの能楽の太鼓師の娘であった。十歳を迎えた鏡花は産褥熱にかかった二十九歳の母を失う。幼くして若き母と死別した悲しみは鏡花文学の詩情の源泉となった。いわゆる強烈な亡母憧憬が鏡花の文学の主題になることは否定できないと思う。さらに、鏡花の作品に現れる女性像も亡母憧憬の心理に影響される。以下「義血侠血」「外科室」「照葉狂言」「高野聖」における女性について探求しようと思う。

一．「義血侠血」の白糸

「義血侠血」は鏡花が明治二十七年の一月、父の計に接して、金沢に帰った折りの作である。作品の大筋は次のようである。水藝の商売をしている白糸は、仕事のため時間厳守をしなければならない。それで出世する前に馬丁という仕事をしていて欣弥に出合った。また、欣弥の上京する学資を提供すると承知した。三年間自分の生活ができなくても、その承諾を堅く守らなければならないと思って、ついにお金を奪うことで人殺しをした。馬丁から検事になった欣弥は恩人である白糸を殺人犯として起訴し、裁判長はそれを是まりとして、彼女に死刑を宣告した。が、「一生他人たるまじきと契りたる」欣弥は、「永く恩人と相見るべから

ざる」を憂い、自殺するという結末である。

この物語は中国の京劇「玉堂春」と似ている所がいくつかある。「玉」で役人志望の王金竜という青年と女主人公の蘇三（遊妓）が関王廟で逢い引きし、王は蘇三から三百両の銀をめぐまれ、科挙に応ずる。それと、「義」で、欣弥が白糸から天神橋の上で学費三十円を渡され法律を勉強すべく上京するのが共通する。その後、蘇三が入獄し、王が巡按使となり、蘇三と法廷で巡り会うのも、「義」とまったく一致している。違うのは「玉」では冤罪であり、蘇三は王によって冤罪が晴れて、めでたく二人が結ばれるのに対し、「義」の方は、白糸が本当に殺人を犯し、欣弥の起訴により、白糸は死刑を宣告され、欣弥も自殺するということである。小論では「玉堂春」と「義血侠血」と比較するつもりはないが、「義」の女主人公白糸に焦点をしばらくしたいと思う。

白糸は一面識もない馬丁の欣弥に援助する理由は何であろうか。それによって泉鏡花の作品における女性像を検討しようと思う。白糸は水藝という仕事をするので時間厳守をしなければならない。だから、欣弥の馬車会社の小僧が早く目的地に着くと言ったら喜んで馬車に乗ってもらった。が、小僧はお客さんを引き止めるために、馬車が車より早いとうそをついた。欣弥はお客さんと約束したのは自分ではないが、同じ会社の人間がお客さんと約束したのであるか、会社の一員としてその約束を守らなければならないと思った。しかし、馬車の規則には乗客の安全のために、スピードを出してはいけない。また、馬を保護するために、馬を酷使してはいけない。欣弥は会社の規則に違反したので、仕事を失った。白糸は欣弥が首になった責任を半分ぐらい担わなければならないという気持ちをもった。そういう義侠心に駆使されたせいか、白糸が欣弥に援助する理由の一つになる。白糸は欣弥に援助する理由は義侠心に駆られるほかに、欣弥に好感を持っているからである。が、明治時代の感情表現は今頃のようにはっきりするわけにはいかない。白糸は「唯他人らしく無く、生涯親類のやうに暮らしたいと云うんでさね。」と言う。それは白糸の愛の告白に等しい。欣弥にお金を送ると口で約束

した白糸は、三年間どのぐらいか想像もつかないほどの大金を後悔なく送り続けたのは、やはり欣弥に対する愛の力に支えてきたのだと思う。

白糸は殺人犯になったのは、やはり欣弥の学資をあまり心配していたので、放心する状態でお金持ちの家に入って、人を殺し、お金を奪ったことになる。水藝という商売は春と夏しかできないので、白糸は欣弥の学資を送るという承諾を守るために、自分を犠牲にしてもいいとやってきた。白糸は法の観念が欣弥ほど強くないが、むしろ好きな人のためにやむを得ず法に背くことをやっても一時の方便だという女性である。

裁判にかけるとき、白糸は検事代理になった欣弥の前に、他人同士ではない欣弥から唾をしかけられると、命を失うことより我慢できないと思い、犯行を認めた。それは懂れる男性から軽蔑されると、我慢できないという女の心であろう。また、検事代理になった欣弥に迷惑をかけないようにと考えたからである。

欣弥は環境に恵まれていないが、運命に屈しない男である。しかも、女にすがって生活する男でもない。白糸の援助を受けるのは、むしろ白糸が将来一緒に生活する人だとひそかに思うからであろう。白糸は欣弥にとっては母、姉、恋人のような存在である。

二. 「外科室」の伯爵夫人

主人公高峰医学士と娘時代の伯爵夫人が小石植物園で相互にすれ違い、社会的羈絆があったので、二人は一緒にならなかった。何年立ったか知らないが、伯爵夫人が肺癌にかかったので、有名な医者即ち当時の恋人の高峰に手術をしてもらうと指名した。麻酔薬を断った夫人が恋人の手に死んでもいいと強い意志を示した。高峰医者は伯爵夫人と手術室で心中してしまった。以上はこの作品の大筋である。

伯爵夫人が「殺されても痛くない」と言い切らねばならぬほどの「秘密」とは、

高峰医者への愛であったと言える。伯爵夫人は高峰をひそかに愛し続けてきたが、現世では結ばれることの許されぬ高峰医者手術してくれるのだから、痛みなどは問題じゃないという。さらに来世或いは天上の世界での愛の完成成就を夢見る夫人の強い願望が、「否、貴下だから、貴下だから」ということばを吐かせている。理屈ではなく情念の世界である。情念こそ女の生命と、鏡花は観念化している。

鏡花は「外科室」を発表する前月、雑誌「太陽」に、「愛と婚姻」と題する論文を寄せている。中に次のような部分がある。

「古来我國の婚礼は、愛のためにせずして社会のためにす。奉儒の國は子孫なからざべからずと命ずるに因れり。もしそれ愛によりて起こる処の婚姻ならむか、舅姑何かある、小姑何かある、凡ての関係者何かある、そもそも社会は何かある。然るに、社会に対する義務の為に止むを得ずして結婚をなす、舅姑は依然として舅姑たり、関係者皆、依然として渠を窮せしむ。人の親の、其兒に教ふるに愛を以てせずして漫に恭謙、貞淑、溫柔をのみこれこととするは何ぞや。既に云ふ、愛は『無我』なりと。我なきもの誰か人倫を乱らむや。しかも婚姻を以て人生の大禮なりとし、出でては帰ることなかれと教ふ。婦人甘んじてこの命を請け行ひて嫁す、其衷情憐むに堪へたり。」

「外科室」のこの部分では、いわば、伯爵夫人の「秘密」は、以上のような「愛のためせずして社会のため」にした婚姻によって生じたものであり、夫に対する恭謙、貞淑、溫柔が、妻としての道、支配的な社会道德であったゆえに、それに殉じようとすれば、いっそう堅く秘めざるを得ない。しかもなお、死をもっても守ろうとする態度は、倫理的であろうとする心の強さだけでなく、逆比例的に愛の強さを表明することになるのであった。

三. 「照葉狂言」のお雪と小親

「照葉狂言」は明治二十九年十一月『読売新聞』に発表された。物語の主人公貢は、北国のさる町に生まれた早乙女にもまごうばかりのみめうるわしい美少年である。しかし不幸にして、はやく両親をうしない、いまは少しく道楽気のある品行芳しからね伯母に養われている身上である。それを哀れんでか鄰近所の女房、娘、下婢などの間に大変可愛がられつつ毎日をおくられる。なかでも真向かいの広岡家に住むお雪というやさしい娘は彼をいつくしむこと実弟のようで、貢の方でも母なきあとの淋しさを彼女の愛情にすがってはさながら本当の姉へでもするように甘え慕うのだった。

ある日旅回りの「照葉狂言」の一座がこの町にやってきたのである。舞の師匠は小親といって、照葉狂言の若い女座頭である。彼女は貢をととても可愛がっていた。そのうち、貢の伯母は賭博で警察に捕まった。頼む身寄りがなくなった貢はその夜から小親に養われることとなり、「照葉狂言」の一座にわれを投ずる。

八年後、狂言・謡曲の心得もととのった一かどの能役者として、彼は一座とともに再び故郷の土を踏んだ。貢は広岡の継母の口からお雪がいまは残忍非道な娼養子のため、その酷薄な運命の下に泣いているとのことを聞かされ、ただ啞然とする。広岡の継母は貢にこう云った。「もし、お前さんにお雪を可哀さうだと思ふ親切気があるのならあんたから頼んでその小親さんとやらの娼の奴をだまして貰っておくれ。それが表沙汰になりさへすれば、もう一廉のもの云ひがつく。そしたら彼奴をきつと叩きだしてお雪が助かる。」貢はいやいやながら継母の辛い頼みを小親に伝えなければならなかった。

以上は物語りの大筋である。貢は母を失ったばかりの頃、母の代償的な存在になり得る女性を求めていた。そうした心の傾きの中で、彼はお雪や小親に引かれている。お雪や小親もまた貢の心情を思えば、おのずと母的な役割をつとめるこ

となる。貢がお雪と小親とに対する情はあくまで姉弟の関係であって、この間にいわゆる痴情的ないやみな交渉はいささかも加わらないのである。いいかえれば、お雪と小親に対する情けは、あくまで姉弟の関係とか、姉弟愛に似ているとか、清純な抒情、処女の曇りなき愛、異性間の清らかで汚れを知らない非官能的な浪漫的愛情だと言える。しかし、お雪と小親の立場からみればどうなるか。

貢はいうまでもなく鏡花の分身である。お雪は従姉の目細照の影、分身である。鏡花は十一歳に母を失ったから従姉の目細照や近隣の湯浅時計店の娘しげに愛され、それが「照葉狂言」や「さゝ蟹」や「誓之巻」の素材となっている。母に死なれた貢にお雪がとてもやさしかった。お雪は実の弟のように貢を可愛がっていた。一方、小親の場合はどうだろう。小親の以下の言葉から探求したいと思う。

「私や、芸人でありながら、お前さんに逢ってから、随分大事に身を持つたよ。よ、貢さん、人に後指さゝれちやあ、お前さんの肩身がせまいだらうと思つたし、其上また点を打たれる身になるとね。」

「お前さんは何にも知るまいけど、何うせ、姉の役ツきやあ勤まらない私だけれど、姉だツて、よ、姉だツて、人に後指さゝれたり、ちつとでも、お前さんとかうやつて居ることの、邪魔になるやうな人が私に有つては厭だから、そりや随分出来にくい苦勞もしたもの。何にも恩に被せるちやない。怨をいふんちやない。不足を云ふんちや無いけれど……貢さん広岡のお嬢さんの顔が見られるやうになりさへすりや、私や、私や、何うなつても可いのかい。よ、よ、私や何うなつても、可いのかよう。」

貢の伯母が刑務所に入れられてから、小親はその伯母の代わりに貢を育てることにした。貢を保護し、母親の役割を果たし続けてきた小親は、貢のことを意識して、芸人としても自分の行為を慎んでいる。お雪のために、その婿をだましてもらっておくと貢に頼まれる時、自分の気持ちが理解されていない辛さとお雪に対する嫉妬が湧いてくる。お雪のために私を犠牲にしてもいいだろうかと貢に聞く言葉を通して、女の嫉妬と男に無視される辛さがはっきり現れてきた。

四. 「高野聖」の小造

この作品は明治三十三年二月に「新小説」に発表される。鏡花はその「創作苦心談」の中で、次のように語っている。

「『高野聖』ですが、あれは別にモデルはありませんよ。私の想像でやったものでさあ。材料は極下らないものです。私の友人で商人をして居る男が、大学生と同行で富山から飛騨の山奥へ這入った話を聞いたのです。飛騨の山中と云ったら随分ひどいところで『高野聖』の中に書いてあるやうな、人も通はないところです、私の友人が山中の宿についたときに、体が疲れて汗をかいたものだから、裏の谷川へ出た折りに美しい田舎娘と出喰はしたのを聞きまして、想像を加へたのです、えーあの女ですか、書くのに随分困りましたよ、何処か高い所を見せなければ感興をぶちこはしてしまひますからな、まさか通常の田舎娘とか、世話女房とかにすることが出来ませんので、あゝ云ふ具合にやつたのです。又坊さんの方ですね、あれも商人とか何とかにすれば全くつまらなくなつてしまひます、絵師や詩人なども配合がよくありません、それでまつ坊さんが幾分か配合がよいだらうと思つたのです。」

この談話を通して考えると、鏡花が友人の話からヒントを得た個所は旅僧が溪流で女に背中を流してもらう下りに使われているだけで、他の筋立の結構や親爺や女が妖怪であることを旅僧に語って聞かせる仕組みなど、すべて彼の着想と見るべきであろう。

物語は若かりし日のある年、僧が飛騨の山越え天生峠で道に踏み迷い、蛇に襲われたり、山蛭に全身まつわりつかれたりしたのち、日暮れてようやく山中の孤屋にたどりつく。案内を乞うと出てきたのは小造の美しい女で、声も清しく、ものやさしい。僧が一夜を乞えば美女は快く応じ、彼を谷川にともなって沐浴の背を流してくれたのち、手料理のもてなし、やがて寝間に案内される。女は隣室の

床につくが夜更けると戸外に、にわかにももの近づく気配、獣の足音、猿の啼声、鳥の羽音、むらむらと入るのぐるりを取りまいて無気味にも喧しい。恐ろしきまに僧は床の中で息を殺していると、女は何かに襲われたように「うむ」と長く呼吸をひいた。僧は一心に経を読む。翌朝、僧は一夜の礼を女に述べて山を降りるが、里ちかい滝のほとりまでくると、なんだか山の女が恋しくなって、ひき返そうかと迷い心がおきる。そのとき、昨日の親爺が里の方からもどってくるのと出食わす。親爺は問わず語りに彼女が神通力を持つ魔女であり、旅の男を弄び飽きると息をふきかけ獣にするのだと告げ「お前様はそれでも感心に志が堅固ちやつたから助かつたのちや。」小造は男を獣にする神通力を持っている魔女である。しかし、全ての男を獣にするわけではない。愛情がないし女を弄ぶ男だけ獣にする相手になる。邪念のない純粋な男に出合うなら、獣の加害を防止し保護する。ここで鏡花の愛に対する観念が見られる。すなわち、愛情のある男女が結ばれてもいいが、セックスだけ求める男はけものに等しいというのである。「愛と婚姻」には愛について次のように説明している。

「人の未だ結婚せざるや、愛は自由なり。諺に曰く「恋に上下の隔てなし」と。然り、何人が何人とを恋するも、誰かこれを非なりとせむ。一旦結婚したる婦人はこれ婦人というものにあらずして、むしろ妻といへる一種女性の人間なり。吾人は渠を愛することあたはず、いな愛すること能はざるにあらず。社会がこれを許さざるなり。愛することを得ざらしむるなり。……」

他人の妻とセックスすることは、社会に許されない。小造が白痴の夫を持っているので、旅人がいくら小造の美貌に引かれても、他人の妻を一夜弄んではいけない。もし、したら獣の行為に等しい。情慾に溺れる獣に変身しても不思議ではないことである。

鏡花が描いた妖怪は血なまぐさい醜惡な妖怪でなく、あくまで清浄で美しい精霊である。「高野聖」の山奥の女も美しく清らかである。母性愛さえ感じさせる。美しい魔女が鏡花の永遠なる女性を求めて描いた空想の変形であり、或るいは幼

くして死別したなき母への憧れが美しい妖婦の姿をかりて具現されたものとも見られるのである。

五. 結 び

鏡花世界に登場する女性には身分の高下、職種の幅において多様である。「義血俠血」の女芸人の白糸と「照葉狂言」の小親、「外科室」の伯爵夫人、「高野聖」の魔性の女・小造、「夜行巡査」の貧乏娘などである。鏡花が描かれた女性はほとんど魔耶夫人のように崇高だったり、美しかったり男性を支えたりする母親のような姉のような女性である。芸人の白糸と小親は愛している男のために、自己犠牲になっても後悔しない。伯爵夫人は恋人との愛を何年立っても心の隅みにし続けている。この世に許されない愛情をあの世界に希望を託し、恋人と心中してしまった。「高野聖」の小造は魔女であり、情慾に溺れる男を獣にする神通力がある。超現実の神秘力を持っている女である。鏡花がめざしたのは、すでにこの世の存在ならぬ女性の畏怖と戦慄と憧憬をまじえた形での現れである。鏡花の幼時体験としての母性喪失が鏡花世界の女性像を大きく左右している。幼い時から回りの女性に可愛がられたり、母に死なれたのでとくに年上の女に可愛がられると思う。そのため、作品中に出る女性は、姉とか母とかのように易しくくれた。が、亡母に憧れる気持ちがいつ立っても消えない鏡花は、母を美化し、この世とあの世界につながっている処女森を通して母のような超現実的な女性を求めている。そして、この超現実的な女性に神通力を持たせている。鏡花世界に登場する女性は鬼神力と観音力を持っている。いいかえれば、女性がある場合には「死」の世界に属する存在であるがゆえに、男性主人公たちをいつでもそこに召還することのできる畏怖すべき神通力をそなえた変化として現れる。もう一方は本来そなわっている母性のゆえに、これに救済の恩寵をそそぐ守護神的な存在として、こもこもにこの世界に君臨しているのである。

参考資料

1. 鏡花における〈母なるもの〉 笠原 伸夫 『国文学』 昭和49年3月
2. 泉鏡花の人と作品 野口 武彦 日本近代文学館
3. 鏡花の作品世界 笠原 伸夫
4. 泉鏡花・徳富蘆花集 筑摩書房 『現代日本文学全集 5』 昭和30年3月